

私をくいとめて

10

綿矢りさ
作
わたせせいどう 画

「あらすじ」「私」と黒田みつ子はまもなく33歳おひとりさま 気になつてゐる多田を「ディスニーランドに誘いたいが、その勇気が出ない」「私が恋にみきれないのは、2年前のある人物にさかのぼる



「ああ、つまんない。私の人生はつまんない。つまんないさが深刻に身体の奥に染みこんでくるのを阻止するため寝転んだまま上半身をひねったり、腰から下の脚を全部自由に浮かしてみたりしたが、すぐ寝て脚はまた髪の上に戻ってきた。

恋がしたいな。恋人でもいたらな。
「では作りましょう。あなたもいい加減に、もうそろそろ、誰かと付き合いしてもいいのではないかですか」

話しかけてないのにAが話しかけてくるなんて、めずらしい。髪に変なくせがついたまま起き上がりてAの声に耳をます。

「何年恋を休んでますか、どうのの話じやないでしょ、あなたの場合は、めったに無い搔さぶりが、帰省によつてようやくやつて來たんだから、この感情のウエーブに乗りましようよ。一応、あせつて当然の年齢ですよ」

「妄想はらくちんだけど、現実はしんどいんだよね。好きになれる相手もいないし」

「あなたはいっぱい恋してますよ、気づいてないだけです。さっきの日焼けした高校球児にも見とれただじゃないですか。ほら、9番の背の大きいあの子ですよ。目元が涼しくて、肌が浅黒くて」

「冗談やめてよ、相手は高校生だよ？ それにテレビのなかの人だし」

「そんなすぐに言いつらうで、ちょっといろいろ関心持つてくださいよ。あ、ほら、テレビ見てくだ

視線だけテレビの画面へ移すと、電動歯ブラシのCMが流れていて、清潔感と頼れる、の二大イメージをどうにか守ってはいるが、何年か前に彼が不倫現場を撮られたことを私はまだ忘れない俳優が、何本前の歯が残ってるのか分からぬ、人工的なきれいな歯並びで微笑んでいた。

「その俳優じゃなくて、ほら、この人です、この人」

テレビ画面にはなんとなさうさんくさい、本当にCMだけのために即席に用意したような、うすっぺらでクリーンな歯医者が、妙に上品な持ち方で電動歯ブラシを持つてこちらへ勧めていた。

「カノウミチルさん？ この歯医者がどうかしたの？」

「歯医者さん、いいと思いませんか？ 私は忘れてませんよ、先週の金曜日に出会ったあの優しげな歯医者さん。いいのではありませんか、彼は。優しい治療、気弱そうな微笑みだけど決然とした診断、すごくいい感じの人だったな。まだ若いのに院長で、評判もいいのか待合室には患者が椅子に座りきれないほどひしめき合っていましたね。ああいう人、お付き合いするにはちょうど良いんじゃないでしょうか」

おもわず笑ってしまった。歯医者の先生、もちろん覚えている。Aは治療中はなにも言わなかつたくせに、しつかりチェックしてたんだ。

「知らなかつた。Aの男の趣味って、あんなだったか」

「私の趣味ではありません。私はあなたにああいう人をおすすめしたいんです。彼が独身なら、容姿、職業ともに申し分ない。アプローチしてみてはどうですか」

歯医者の顔を思い出そうとしたけど、なにしろ半分が薄いグリーンのマスクで覆われていたため、ほとんど印象がない。確かに感じの良い人だったが、きっと誰にも感じが良いんだろうと思つただけで、個人的な胸のふるえは何一つなかつた。

「もっと深く思い出してください。あなたは確かに彼に好感を抱いてました」

彼が院長を務める「スマイル歯科」はどんな町にある小さな医院で、痛みのない治療を目指していると医院のH.P.に記っていたのが気に入り、近所だし歯石取りに行ってみた。清潔でこちんまりした待合室で十分ばかり待つたあと診察室に通されて、彼に診察してもらつた。謳い文句通り、丁寧に診察する先生の指使いはソフトで、唇を無理に開いたり歯を乱暴に器具でこすつたりすることなく、ゆっくりと優しかつた。

「右の奥から二番目の歯が少し黒んでいますが、まだ虫歯とはいえないでの経過を観察しましよう。今日はとりあえず歯石取りだけしましょうね」

マスク越しの彼の声は穏やかで私の身体を安堵で包み込み、なぜかホツトリラックスできた……。

「いや、あれは虫歯の治療をせずに済んだからホツとしただけでしょ」

目の下のクマさえ隠さず、部屋前より少しだけマジな服を着て歯医者に行っていたけど、次の診察日には、丈が太ももの真ん中まですり上がりそつたワニピースを着て出かけた。診察台に寝そべったときに、ちよいと太ももが見えるよう、Aが細心の注意を払つて丈にこだわった。いつもなら下にスキニーテニムを穿かないと絶対着なかつた、私の私服のなかでももつとも女の子らしい、ノースリーブの小花柄のワンピース。足元は残念ながら可愛いのが一つもなかつたので「べたん」のサンダル、しかし足の爪にはつづじ色のマニキュアを塗つた。髪まで巻いた。私の普段の格好を知つてゐる会社の人が見たら、なにかの仮装かと思うだろう。Aは私に歯磨きを二回と歯間ブラシを二回させて、鏡の前で歯を剥き、念入りに一本一本チェックしたあと、唇にグロスを塗つた。

しかし私は普通に診察されただけで、治療は帯りなく完了し、Aからの指示もいつさい無かつた。スカートから出た太ももにも、寝そべると即座にブランケットがかぶせられた。経過を見るためにまた一週間後来て下さいと先生が言い、私はこの経過を見るための最後の診察をさぼることが多いのだが、Aは来たいたるうと思い、誠意を込めてハイと答えた。

先生は治療を終えると忙しそうにすぐ次の患者さんに移り、歯間掃除や歯磨きの説明は女性の歯科衛生士さんにバトンタッチされ、あつという間に待合室。

「こ安心くたさって言つたってね、相手にも気持
ちがあるんだよ、A。あの先生はもちろん私をたた
の患者の一人としてしか見てないし、たとえ合コン
で出会つたとしても私なんて相手にされない」
「どうして人気の市場に参戦しないのですか！ 性
格とか経済力とか外見とか、良いものは良いのに、
あなたは変なブライドがじゃまして、異性を好きに
なるきつかけがねじれすぎてる」
「図星だから言い訳できないけど、でも歯医者つ
て。私の人生に接点無さすぎ」
「歯がある限り、接点はありますよ。とにかく来週
の火曜日、できるだけおしゃれして歯医者さんに行
つてくださいね」
やる気のAに圧されて、ふたんならノーメイクで

目の下のクマさえ隠さず、部屋着より少しだけマシン服を着て歯医者に行っていたけど、次の診察日には、丈が太ももの真ん中まですり上がりそつたワニースを着て出かけた。診察台に寝そべったときに、ちょいと太ももが見えるよう、Aが細心の注意を払って丈にこだわった。いつもなら下にスキニー・デニムを穿かないと絶対着なかつた、私の私服のなかでももっとも女の子らしい、ノースリーブの小花柄のワンピース。足元は残念ながら可愛いのが一つもなかつたので「べたん」のサンダル、しかし足の爪にはつづじ色のマニキュアを塗つた。髪まで巻いた。私の普段の格好を知つてゐる会社の人が見たら、なにかの仮装かと思うだろう。Aは私に歯磨きを二回と歯間ブラシを二回させて、鏡の前で歯を剥き、念入りに一本一本チェックしたあと、唇にグロスを塗つた。

しかし私は普通に診察されただけで、治療は帯りなく完了し、Aからの指示もいつさい無かつた。スカートから出た太ももにも、寝そべると即座にブランケットがかぶせられた。経過を見るためにまた一週間後来て下さいと先生が言い、私はこの経過を見るための最後の診察をさぼることが多いのだが、Aは来たいだろうと思い、誠意を込めてハイと答えた。

先生は治療を終えると忙しそうにすぐ次の患者さんに移り、歯間掃除や歯磨きの説明は女性の歯科衛生士さんにバトンタッチされ、あつという間に待合室でお会計を待つだけになつた。

「なんも起きなくて残念だったね、A。せつかくのワニースだったのに」

「ワニースですよ。今日は視覚的に插さぶりをかけておいたので、あなたの姿は先生の意識に深く沈殿して、次週からは態度も変わるでしょう」

先生の意識に沈殿するとしたら、一生懸命診察していた私の歯並びの方じやないかなと思ひながら名前を呼ばれて受付に行つたら、受付の人人が申し訳なさそうな顔をしている。